

国語選抜試験 模範解答

■採点基準
記述式問題では、同意表現は可。書きぬぎの場合のみ、正答例以外は不可。

新中三

一 次の——線の読みを書きなさい。

- (5)(4)(3)(2)(1)
 哀愁を帯びた曲を聴く。
 類似点を列挙する。
 新曲の制作を委嘱する。
 寒さで体が凍える。
 お客さまの注文を承る。

(1) あいしゅう

(2)

るいじ

(3)

いしよく

(4)

こい (える)

(5)

うけたまわ(る)

二 次の——線を漢字で書きなさい。

- (5)(4)(3)(2)(1)
 実験の成功をしゆくふくする。
 彼はてんけいな日本人だ。
 会社のぎようせきがとてもよい。
 すさんだ気分がなごむ。
 人形をかかえた少女を見た。

(1) 祝福

(2)

典型

(3)

業績

(4)

和

(む)

(5)

抱

(えた)

三 次の各問いに答えなさい。

問一 次の——線の語と意味・用法が同じものを、ア～エからそれぞれ選びなさい。

- (1) あの建物は倒れそうで倒れない。
 ア この道は平らでない。
 イ ここはそれほど暑くない。
 ウ 弟は少しも努力しない。
 エ 残りの時間は余りない。
- (2) ぼくは毎日電車で通学する。
 ア みんなと公園で遊ぶ。
 イ 金づちでくぎを打つ。
 ウ 母は家事でとてもいそがしい。
 エ この仕事を三日で仕上げる。

(1)

ウ

(2)

イ

問二 例にならって、各組が対義語どうしになるように、上下の□に反対の意味の漢字一字をそれぞれ書きなさい。

- 例 出席 ↓ 欠席
 A長 ↑ 短 B
 (2)(1) A加 ↑ ↓ B少

前後の漢字で判断する。

(1)

A

延

B

縮

完

(2)

A

増

B

減

完

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

①つれづれなる折、②昔の人の文見出でたるは、ただその折の心地して、いみじくうれしくこそおぼゆれ。まして亡き人などの書きたるものなど見るは、いみじくあはれに、年月の多く積りたるも、ただ今筆うち濡らして書きたるやうなるこそ、返す返すめでたけれ。

何事も、④たださし向かひたるほどの情ばかりにてこそはべるに、これは、ただ昔ながらつゆ変はることなきも、いとめでたきことなり。

(注) 情——気持ちの通い合い。

(「無名草子」より)

問一——線①「つれづれなる折」の意味として最も適当なものを、ア～エから選びなさい。

ア 気分が沈んでたまらないとき。

イ 心配事があつて悩んでいるとき。

ウ 悲しいことがあつてつらいとき。

エ することがなくて退屈なとき。

①「つれづれ」は「所在ないこと。退屈なこと」を意味する。

問二——線②「昔の人」とありますが、どのような人ですか。最も適当なものを、ア～エから選びなさい。

ア 昔なじみの人。

ウ 昔亡くなった人。

①手紙を交わしたことから判断する。なお、ウは直後に「まして」とあるので「昔なじみの人」の中の一部である。

問三——線③「こそおぼゆれ」の「こそ」と「おぼゆれ」の部分で用いられている古文独特のきまりを何といいますか。書きなさい。

①係りの助詞「こそ」から判断する。

係り結び(の法則)

問四——線④「たださし向かひたるほどの情ばかりにてこそはべる」とありますが、これと対照的なこととして表されている部分を、文中から十五字で書きぬきなさい。

ただ昔ながらつゆ変はることなき

①その場限りではなく、時をへても変わらないことを表している部分を探す。

問五 筆者は、「手紙」のどのような点をよいと考えていますか。最も適当なものを、ア～エから選びなさい。

ア 直接話すよりも自分の気持ちを率直に表現することができ、手紙を交わした相手とは変わらない友情で結ばれる点。

イ 時間や空間を超えて人々と交流でき、会ったことのない昔の人や違う国の人でも、読めばすぐに心が通わせられる点。

ウ いくら時間が経過してもつづられた言葉は変わらないで残り、読めばすぐに当時のことが鮮やかによみがえる点。

エ 自分の気持ちが落ち着かないときに書いてしまった手紙でも、時間をおいて文面を何度でも書き直すことができる点。

①最後の文に注目する。

ウ

【口語訳】

することがなくて退屈なとき、昔なじみの人からの手紙を見つけ出したのは、ただもうその(手紙をもらった)ときの心地がして、たいそううれしく思われる。まして亡くなった人の書いた手紙などを見るのは、たいそうしんみりとして、長い歳月が過ぎていくのに、たった今筆を(墨で)濡らして書いたような感じがする(のは、返す返すもすばらしい)。

何事も、顔を合わせている間だけの気持ちの通い合い(で、時がたてば消えてしまうもの)ですが、この手紙というものは、(時を経ても)ただもう昔のままでも少しも変わることがないのは、まことにすばらしいことだ。

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

〔主人公の操は、父の仕事の都合で、二学期の途中に転校し、新たな学校へ通うことになった。その初日のことです。〕飾り気のない校舎だが、手入れはよく行き届いている。磨かれた窓から、操を励ますように澄명한青い空が見えた。下駄箱や廊下に運動用具がならんでいないのが、ひとまず操を安堵させた。度重なる転校で、早々と校風を見抜く眼力だけはたけていた。

学校によっては、ボールや体操器具がこれみよがしに廊下へならび、ひとりひとりがいかに熱心にそれと取り組んでいるかを誇らしげにあらわした。操は小柄で非力なのを気にしている。生徒をひとりもらさず運動に駆り立てる一致団結の精神には、もつともなじめないのだ。教室への第一歩は、これまでに経験した緊張や気詰まりと似たり寄ったりだった。少しだけよめき、ひそひそ声に変わる。操は力の抜けた声で、面白みのないあいさつをし、指定された席へおとなしく腰かけた。隣りあう生徒の好奇心を満たすだけの応答を小声でかわした後は、不慣れた教科書へ目を落とした。字面を目で追っても、頭へ入ってこない。その後、生徒たちはざわつくこともなく教室は平静に戻った。操は、またしても取るに足らない生徒だと評価されたことを察した。

操は級友たちの顔や名前を覚えるよりも、天井に打ちこまれた鉄の数や、床の釘穴の数を知るほうが先になるだろうと思っただ。ほうっておいてくれればまだいい。不得手な球技に無理やり誘われやしないかと、気が気でない。うまくボールを扱えず、もたもたしている我が身の姿を容易に想像できた。そんな具合だったので、次の休憩時間に声をかけられたときは驚いた。「教科書は、前と同じだったかい。」その生徒は気さくに尋ねた後で、つけ足すように自己紹介をした。榊島至剛と名乗った。こんなにもさりげなく、好奇心や物見高さもなしに声をかけられたのははじめてだった。

「白樺の榊に鳥と書いて、かわしまと読むんだ。至剛っていうのは発音しにくいだろう。さっさと忘れてくれていいよ。一応説明しておくけど、至るに剛力の剛と書いてみちたかと読ませるのさ。至大至剛っていう孟子のことだよ。どんなことにも屈せず、かぎりなく強いっていう意味。ぼくが生まれたときはまだ曾祖父が健在で、こんな大仰な名前になった。」苦笑しながら言う。みちたかというその響きが、見るからに利発で端正な少年の人となりといかに融け合っていたか、操はことばにあらわせない性分をはがゆく思った。榊島は、主な教科の進み具合や担当の教師の気質やあしらい方などを、姿にたがわず端的に説いた。それがどれほどの射た解析であるかは、いつしかまわりに集まっていたほかの生徒の反応で察することができる。

わずか十分の休憩のあいだに、操はこの学級の心意気が、榊島という端正で気持ちのよい生徒に収斂しているさまを目の当たりにした。彼は、十四歳という年齢の持ち得るかぎりの機知に富み、明朗でうるわしく、それらは少年の人柄に最大限生かされていた。至剛という名前のおよぼす印象は、すらりとした体つきではなく、おおらかで惑いのない気立てにつきる。榊島は、操が内気で小声であるということを重荷に感じないよう、それとなく配慮してくれた。月並みに「ほら、もつと大きな声をだしてご覧」などと励ましはしない。皆と活発にまじわるのを無理強いすることもない。そばにいて始終かばってくれるというやり方ではなく、操が精一杯努力した後で、どうしても手助けがほしいと思うときに、必ず手を差し伸べるというふうだった。「静かなのはいいことだよ。声をはりあげなくたっていい。耳を澄ませば、いくらだって聞こえるんだから。」

(注) 大仰な——おおげさな。 収斂——一つのものに集約すること。(長野まゆみ「鳩の栖」より)

問一 線①「ひとまず操を安堵させた」とありますが、その理由を述べた次の文の□にあてはまる言葉を、「強要」という語を用いて、十五字以上二十字以内で書きなさい。

操は、下駄箱や廊下に運動用具がならんでいないのを見て、□と思って安心したから。
不得手な運動を強要されることはない

問二 線②「似たり寄ったり」と、ほぼ同じ意味を表す四字熟語を、ア～エから選びなさい。
ア 異口同音 イ 大同小異 ウ 同床異夢 エ 一心同体 イ

問三 線③「少しだけよめき、ひそひそ声に変わる」とありますが、これは学級の生徒たちのどのような気持ちの表れですか。文中から三字で書きぬきなさい。
好奇心

問四 線④「その後、生徒たちはざわつくこともなく教室は平静に戻った」とありますが、どのようなことを表していますか。最も適当なものを、ア～エから選びなさい。
ア 操が緊張のためにうまく話せなかったこと。 イ 生徒たちが学習にとっても意欲的なこと。
ウ 生徒たちがすぐに操から興味を失ったこと。 エ 操がクラスに親しみをもてなかったこと。
ウ

問五 線⑤「榊島至剛」とありますが、彼はどのような人物ですか。文中から十三字で書きぬきなさい。
見るからに利発で端正な少年

問六 線⑥「静かなのはいいことだよ」くらだって聞こえるんだから」とありますが、ここには操に対する榊島のどのような心づかいがうかがわれますか。文中の言葉を用いて、三十五字以内で書きなさい。

榊島が操のためにどのような配慮をしたのかを読みとる。(例)
じ 操 が 内 気 で 小 声 で あ る と い い 。 こ こ に は 操 に 対 す る 榊 島 の ど の よ う な 心 づ かい が う かが わ れ ま す か 。 文 中 の 言 葉 を 用 い て 、 三 十 五 字 以 内 で 書 き な さ い 。
じ 操 が 内 気 で 小 声 で あ る と い い 。 こ こ に は 操 に 対 す る 榊 島 の ど の よ う な 心 づ かい が う かが わ れ ま す か 。 文 中 の 言 葉 を 用 い て 、 三 十 五 字 以 内 で 書 き な さ い 。

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

親しい友人関係というものを考えてみる。友人とはそもそもなんであるのか。われわれが友人をありがたい存在として感じるのは、そこでの人間関係がつねに相互の人間改造をとまなうからである。ときにははげしい議論をたたかわせることもあろうし、場合によっては、けんかすることもあろう。しかし、友人というのは、つねに人間を変えてくれる。もちろん、一夜のうちに一人の人間の全人格が変わる、などということはありえない。変わり方はゆるやかであって、本人同士もその変化に気がつかないのがふつうである。だが、友人によって人間は変わる。友人は人間を変えるのである。

そのような変化の力はどこから出てくるのであろうか。あたらしい共通項が友人関係のなかでは、もっぱら築造されてゆくからである。自分がいままで知らなかったことを教えられ、あるいは、自分が考えてもみなかったような、異なったものの見方にふれさせてもらう——そんなプロセスの連続、それがほんとうの友人関係というものではないか。①お互いが手持ちのものを出しあって、おなじカードがあった、といって話をあわせるのではなく、②まったく異質なものを出しあって、あたらしいカードをつくるのが、友人であり、そこでは、「つきあい」が発生するのである。

友人関係だけではない。師弟の関係、夫婦のあいだの関係、それらは、すくなくとも理想的に言えば、そのような性質のものであろう。相互に異質であることの確認がそこでの前提だ。異質であって、それがお互いにとっての刺激になりうるから、人間はつねにほかの人間からなにかを学ぶことができる。知識を学ぶこともあろうし、生き方や信条を学ぶこともある。もちろん、「学ぶ」といっても、べつだん、教室で教科書を読むような種類の学び方ではなく、ほとんど無意識的な学び方であるのがふつうである。だが、つきあいの本質は相互学習ということだ。お互いの異質な刺激が鈍化して、新鮮さがなくなる③、それは、「なれあい」になったり、「マンネリズム」になったりする。

賢明なつきあいを維持しあっている人たちは、それを避けるために、④つねにべつたりくつきあった状態をつくらぬように配慮をする。⑤AとBとが親友である、というのは、AとBとがなにをするにもいっしょということではなく、むしろ逆に、AとBがそれぞれに自由な時間と活動分野をもっているということだ。そしてそれぞれがその自由な活動の合間にときどき接触しあうことによって、友人はつねに新鮮でありつづけ、相互刺激的な存在でありうる。いつもいっしょで、べつたり仲良し、というのは長くつづくことができない。ふたりの人間が、つねに異質な部分を用意することによってのみ、相互刺激の可能性は持続する。親しい関係、人間改造的な関係は、じつは相互に相手を解放しあう関係なのであって、相互拘束的なものではけっしてない。AとBがつねに異質だからこそ、AとBがきずきあげるあたらしい共通項はつねにつくり変えられ、A・Bそれぞれがそれによってつねにあたらしい存在でありつづけることができるのである。

(注) マンネリズム——かたにはまって新鮮さを失うようになる傾向。
(加藤秀俊「人間関係」より)

問一——線②「まったく異質なものを出しあって、あたらしいカードをつくる」とありますが、このような関係の持ち方を「つくる」態度と名づけるとすれば、——線①「お互いが手持ちのものを出しあって、おなじカードがあった、といって話をあわせる」ような関係の持ち方を何と名づけたらよいですか。最も適当なものを、ア・エから選びなさい。

- ア 「みがく」態度
- イ 「たえる」態度
- ウ 「さがす」態度
- エ 「あそぶ」態度

ウ

❶「おなじカードがあった」ということは、おなじカードをさがしていることにつながる。

問二——線③「それ」がさしているものを、文中から五字以内で書きぬきなさい。

つきあい

問三——線④「つねにべつたりくつきあった状態をつくらぬように配慮をする」とありますが、何のために配慮をするのですか。その理由を「新鮮さ」という語を用いて、五十字以内で書きなさい。

❷直前の「それ」が何をさしているのかを考える。

(例)

な	く	お	互
る	な	り	い
の	、	の	異
を	「	」	質
避	け	な	な
ける	れ	あ	刺
た	あ	い	激
め	「	」	が
	や	「	鈍
	「	」	化
	マ	シ	し
	ン	テ	て
	ネ	、	、
	リ	新	鮮
	ズ	さ	さ
	ム	が	が
	「	」	な
	に		な

問四——線⑤「AとBとが親友である」それぞれに自由な時間と活動分野をもっているということだ」とありますが、これと同じ内容を表している一文を文中からさがし、初めの五字を書きなさい。

親しい関係

問五 筆者が友人同士の好ましくないつきあひ方の様子を表すのに用いている擬態語を、最後の段落から一語で書きぬきなさい。

べつたり

問六 この文章における、筆者の考えに合うものを、ア・エからすべて選びなさい。

- ア お互いが異なった個性や考え方の持ち主であることを認め合っており、友人関係にとって大切なことである。
- イ お互いに共通の話題や趣味を持ち、相手を常に身近な存在として意識できることが、友人関係にとって大切なことである。
- ウ お互いに共通する部分を見いだして、なんでも話し合える仲間を増やしていくことが、友人関係にとって大切なことである。
- エ お互いが自由な時間を持ち、個別な活動を続けるなかで、相互に刺激し合うことが、友人関係にとって大切なことである。
- オ お互いに意見は異なっても、相手のなかに自分と全く同じ部分を見つけていくことが、友人関係にとって大切なことである。

❸文中で述べられているかどうかで判断する。

ア・エ 完

難

やや難